
里沙子と宏樹

神姫

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

里沙子と宏樹

【Nコード】

N0873H

【作者名】

神姫

【あらすじ】

あたしは猪上里沙子。仲良しの友達、小川宏樹が好きだと言うことに気づいていない今日この頃。ある日、二人はクラスが違うが、学年生徒会で一緒になって、喜んでいました…。

プロローグ（前書き）

登場人物

主な人

・猪上里沙子

・小川宏樹

・南原一樹

・山野上聡美

時々登場する人

・時風希美

・君原力哉

・竹内隼人

・沢田美野里

ブローグ

「ねえ、宏樹。学年生徒会一緒に行こう。」

「うん。」

あたしは、猪上里沙子。中2のまあ、ふつつな女子。

あたしの…。友達として好きな、小川宏樹。一番の男友達でも良いだろう。

小学校は違ったけど、1年の時、同じ部活で、初めて知ったんだけどね。

クラスも違ってたし。

中2になっても、クラスは違った。

そして、部活も変えちゃった。

でも、今は、同じ副委員長。一緒に行動することが多い。

「あれ、かつちゃんは？」

かつちゃんとは、あたしのクラスの委員長、南原一樹のことだ。

「ああ、先生によばれてた。もうすぐ来るよ。」

「そうなん。」

かつちゃんは、とても優しい男で、宏樹と仲が良い。DMといっても通じる。

「いやあ、遅れた遅れた。」

「「お、かつちゃん。」」

あたしと宏樹は口をそろえて言う。

「あ、そういえば、聡美は？」

（山野上）聡美とは、宏樹のクラスの委員長である。

「ああ、そういえばさっき先生に呼ばれてたな。」

「そっか、じゃあもうすぐ来るね。」

何を言うときも、宏樹は気持ち悪いくらいに笑顔だ。

顔は、イケメンとは言えないが、とてもブサカワイイ顔だ。

（正式にブサは全く必要ないが、何となく。）

「はあ、学年生徒会だるい。」

「だよな。」

「小川と猪上さんそうとうお疲れのようで。」

「「そういうかつちゃんこそ。」ふふふ。」

あたしと宏樹とかつちゃん。（聡美も）仲が良いし、雰囲気が良いらしいので、

3人の周りには、結構人が集まる。聡美は、生徒会の時くらいだけ。

なんだけどね。

「はあ、疲れた〜。」

「お、聡美。お疲れ〜。」

「うん。」

関係ない話。あたしと宏樹とかつちゃんと聡美。みんなB型なんだ。でも、偶然って意外と嬉しいもんだ。

「お〜、席着いてるかあ？」

先生が来た。

今日は、明日の学年集会の打ち合わせだという。

「司会は本部がやってくれるから……。はじめの言葉と終わりの言葉、誰かやってくれないか？」

しーーーーーん……………。

もちろん、そんな面倒くさいことに手を挙げるものか…。

「いないのかあ？じゃあ、1組からやろう。委員長と副委員長、どっちやるか決めて。」

「良かった。あたしとかつちゃんはまだ先だね。」↑ちなみに4組。

「俺らも。まだ大丈夫で良かった。」↑ちなみに3組。

「いいかあ、次は2組で次は3組、4組、また1組とぐるぐる回るからなあ。」

「はい。」

部活帰り

やっと終わった…。終わった終わった…。

「ふぁゝ。やっと終わった。」

宏樹があくびをしながら言う。

「そっやねゝ。」

「さて、部活行くかゝ。」

「そっやねゝ。」

「じゃあ、猪上さん、一緒に行こうかゝ。」

「ああ、あたしは音楽部ゝ。」

「あ、そっかゝ。って変わってたっけゝ？」

「うんゝ。宏樹気づくの遅いゝ。」

「わりい、俺は無神経やけんゝ。」

だらしない会話を続けていると、あたしのクラスの担任が来た。

「あれえ、猪上さんと…。小川君？部活行かないの？」

「ああ、今行こうとしてたところです。」

「よっしゃ、行くか。」

「そうやね。」

そして、あたしと宏樹はお互いの部活に行った。
あたしは、元々は宏樹と同じバスケットだったが、嫌がらせが原因で、音楽部に移ったわけである。

聡美もちなみにいつしよだ。

「あ、聡美先に来てたの。」

「あ、うん。猪上さん小川君と話してたから。」

「あ、ごめんねえ。」

「ううん。いいよ。」

音楽部は、楽器で演奏したり、合唱したりするのである。

グループもあり、あたしは、

山野上聡美、時風希美、沢田美野里、沢田紗憲さのりの5人のグループである。

（関係ない話。ちなみに、この5人も全員B型。）

「ねえ、曲練習しよ。」

「よっし、やろーう!」

さすがにノリが良い。

「ふう、部活もやっと終わった。」

「今日はなんか疲れたねえ。」

「うん、いつものことだよ。」

部活が終わって、帰ろうとしたとき、3組の教室に、明かりがついていた。

時風希美は、テニス部の友達を待つと言うことで、4組の教室で、勉強している。

3組の教室には、宏樹がいた。

「あれ、宏樹何してんの？」

「あ、忘れ物。」

「ふーん。気をつけなよ。」

「うん、あ、あった、じゃ、バイバイ。」

どうやら急いでいたようだ。

さて、あたしも帰るか。聡美と一緒に。

「聡美、帰ろう！」

ケンカ友達

「ねえ、猪上さん。」

「なあに？」

「猪上さんて、好きな人とかいるの？」

「え、多分いないと思うよ。」

「へえ。」

あたしの好きな人…は、多分いないと思う。

だって、自分でも、…宏樹のことが好きなのか、
わからないもん。

友達としてなら…。ね。

「でもね、あたしは聡美が好き！」

「なに、突然。」

あたしは、こうやって自分に嘘をついていた。

でも、聡美のことも好きだもん。

嘘まではいかないかな。

「じゃあね。聡美。」

「うん。また明日ね。」

聡美と別れてから、家までの道のりは遠い。

ながいながい坂を自転車でのぼる。
息切れもする。

そのとき、後ろから、同級生の渡部十八わたべとおやが、通りかかった。

「お、猪上今帰りか。おせえな。」

「あんたこそ、人のこと言えないよ。」

近所の十八は、あたしの男友達だ。
ケンカ友達でもいいかもしれない。

「俺はいいの。お前はドジだから心配していつてやってんだ。感謝
した方がいいんじゃないかね？」

「余計な心配はいいよ。それとドジじゃないもん。」

「心配するな。わかってるって。嘘つかなくても良いんだぜ。」

「もう！」

とまあ、やはりケンカ友達だろう。
しかし、不思議と嫌な感じはしない。

「十八のばーか！」

「猪上のドージ！」

いちいちむかつくヤツだけど、

あたしから見れば、良き友達である。

家に帰り着いて、冷蔵庫から麦茶を出してコップに注ぎ、飲む。
いつものことだが、今日は何となくもやもやしていた。

あたしの、好きな人は誰なのだろう。

まず、好きな人は見つかるのだろうか。

大切な人

次の日、ぼーっとしながら学校へ行った。
昨夜は眠れなかったのだ。

別に悩んでいたわけでもない。
ただ、何となくだ。

教室に入って、提出物を出し、席に着く。
朝読書用の本を出し、それを読む。

「里沙ちゃん、おはよう。」

「あ、おはよう瑠璃ちゃん。」

クラスメートの鮎川瑠璃ちゃんと藤本卯月ちゃんだ。
よく一緒にいるので、良い友達である。

だるいねーなど、他愛のない話するのが日課である。

あと、好きな人の噂とか、誰と誰が付き合ってるとか、
恋の相談などもする。

あたしに好きな人はいない。といつも答えるが、
二人は好きな人がいるので、よく相談に乗っている。

「今ね、好きな人っていうか、好きな人は自分にいるのかなって思
ってた。」

瑠璃ちゃんは、あたしと似たような悩みを持っている。

あたしにも、好きな人がいるのかがわからない。

「そうだね。あたしもそんなところかな。」

「へえ、里沙子ちゃんもそうなんだ。」

はっ、いつてしまった。

あたしは、いつもは、好きな人はいないとしか言わないのに、瑠璃ちゃんの相談事に同意してしまった…。
まあ、相談に乗ってくれるといいな。」

「…気になる人とかいるの？」

「え、ん…。どうかね？」

「いるんじゃないの？」

「い、いないと思うよ。自分でもわからないから。」

「そうなの？」

今、目の前を宏樹が通りかかったような気がした。
本物じゃなくて、幻が。

自分は、好きな人はいなくても、大切な人はいるとような気がした。

大切な人（後書き）

読んで頂きありがとうございます！

文節とか、文章構成とか下手くそで

多分…。いや、絶対読みにくいとは思いますが、

よかったら、感想やアドバイスをもらえると有り難いです。

好きな人

「今日の放課後、委員長さんと副委員長さんは、2年2組に集まってください。宜しく願いします。」

朝の会で、先生に言われた。

「里沙ちゃん、大変だね。」

「うん…。めんどくさいわあ…。」

「がんばってね。」

「うん。ありがとう。」

また宏樹に会える。

あたしは、宏樹に会うのが楽しみだった。

体育の時間。3組と4組は、合同で体育をするので、この時間でも会える。

でも、体育の時はあまり話さない。
男女別々だから。

今は、女子は高飛びをしているところだ。
120センチに挑戦したが、飛べなかった。

周りから、ああ…。と声が飛ぶ。

それでも、私は運動神経が良い。

みんなに期待されているほど。

腰に棒が当たり、痛かった。

「大丈夫？」

「ケガしてない？」

「里沙く大丈夫？」

周りのみんなに心配されながら、列に並ぶ。

「大丈夫だよ。」

かっこわるいトコ見せちゃった。

「猪上さん、ドンマイやな。」

「飛べるとおもったけど。」

「次、がんばれよ。」

男子にも声をかけられる中、一人だけ心配してくれる人がいた。

「猪上さん、腰大丈夫？」

宏樹だった。

「ああ、心配してくれてありがとう。大丈夫だよ。」

「そっか。なら良いんだけど。」

宏樹の優しい気配りが好きだ。

いつもを笑顔を絶やさない。

そんなひとになりたい。

…私が今、こんなことを思ったのは、
宏樹が好きだったことに気づいたからだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0873h/>

里沙子と宏樹

2010年11月16日08時16分発行